

文学とポピュラー音楽

(1) 文学と音楽のつながりがもたらすもの

加藤 隆 治

「音楽と文学の関連性」というテーマでの研究は、まずブルース・スプリングスティーン (Bruce Springsteen) のアルバム、『ザ・ゴースト・オブ・トム・ジョード』 (*The Ghost of Tom Joad* 1995) を抜きに語ることはできないだろう。あまりにも有名な世界的ロック・シンガーである彼は、あのレーガン時代の大ヒット曲、「ボーン・イン・ザ・USA」 (“Born in the U.S.A.” 1985) によって、ある程度国粹主義的なイメージ (実際はマスコミによって作り出された虚像だったのだが) があるのは事実である¹。従って、彼の労働者階級の代表というイメージ部分を割り引いても、スプリングスティーンによるジョン・スタインベックの『怒りの葡萄』 (*The Grapes of Wrath* 1939) の音楽化に対して違和感を持つ人もいたかもしれない。しかし、来日して大新聞などのマスコミに取り上げられた彼独自の『怒りの葡萄』の世界は、その関連のなかで検証されるべきだろう²。

『怒りの葡萄』を例にしてみると、このスプリングスティーンのアルバムが発

-
- 1 「ボーン・イン・ザ・U.S.A.」は、実際は Hemingway の「兵士の帰還」 (“Soldier’s Home”) と比較されうるベトナム帰還兵の歌である。決して「アメリカ万歳」という内容の歌でもなければ、アメリカの明るい未来について歌った内容でもない。しかし、この曲がヒットしているさなかに、当時のレーガン米大統領が曲の内容も知らずに再選キャンペーンにこの曲を使おうとした、というエピソードが残っている。もちろん、スプリングスティーンが拒否したのは言うまでもない (Steven Rosen)。
 - 2 朝日新聞は、「ロックの『ボス』変節か」というタイトルで、4人の音楽評論家等の意見を掲載している。8年半ぶりに来日コンサートを開いた彼のミュージシャンとしての姿勢に変化が見られるのかどうか、それぞれの論者が書いている。アエラでは簡単なインタビューと共に彼の真摯なミュージシャンとしての姿勢が伝えられている。産経新聞ではライブ・レポートが詳細に伝えられている。

売される以前に、キャメル (Camel) というイギリスのグループが、『ダスト・アンド・ドリームス』 (*Dust and Dreams*) というタイトルでこの叙事詩的な小説を 1991 年に音楽化している。このグループはスプリングスティーンと比較すると一般的な知名度は低いかもしれないが、ロック・ファンの間では有名なグループである。数年前にも 4 度目か 5 度目の来日を果たし、彼らのアルバムのほぼ全作が日本盤で入手可能である。このグループはアルバム一枚単位で何かの物語に基づいて作る、いわゆるコンセプト・アルバムを得意としている。有名なところではポール・ギャリコ (Paul Gallico 1898~1976) の作品から着想を得た『スノー・グース』 (*The Snow Goose* 1975) や、小説ではないが日本の小野田少尉の帰還という事件からヒントを得た『ヌード』 (*Nude* 1981)、さらに 1996 年のアルバムでは、グループのリーダーのルーツであるアイルランド系のアメリカへの移民の歴史を綴った『ハーバー・オブ・ティアーズ』 (*Harbor of Tears*) というアルバムを録音している。従って、このグループが『怒りの葡萄』を取り上げても、スプリングスティーンよりは自然だと言える。

さらに、このキャメルの『ダスト・アンド・ドリームス』とスプリングスティーンの『ザ・ゴースト・オブ・トム・ジョード』のはるか以前に、もう一枚の『怒りの葡萄』関連のアルバムがある。1930 年代から活躍する伝説的なフォーク歌手であるウディー・ガスリー (Woody Guthrie) が『怒りの葡萄』を下敷きにした音楽を作っていた。このように『怒りの葡萄』をテーマにした楽曲はこの他にも数多くみつかることは驚きである。

この『怒りの葡萄』の例から分かるように、音楽と文学のつながりには年代の広がりがあり、かつアメリカ文学の作品に対してアメリカのグループやアーティストだけにとどまらず国際色が豊かである。そして、それぞれのアーティストが自らの視点で様々な文学作品を取り上げている。こういった文学との接点を見いだせるロック、フォークなどのポピュラー・ミュージックは、文学研究 (例えば歌詞の研究) のみならずアメリカ学的な観点 (例えばアーティストや音楽、その音楽が生まれた時代背景) から、十分にリサーチや研究に値す

ると言える。

音楽と文学の関係は、これまで様々な形で文学研究の場に取り上げられてきている。ジャズと文学のつながりは言うまでもなく、60年代末から70年代初頭にかけてのビート・ジェネレーションの作家達(またはカウンター・カルチャー)と同時期のサイケデリック・ロックとの関係は深く、様々な角度から研究されている。しかし、サイケデリック・ムーブメント以降のロックやポップ・ミュージックは、あまり批評家や研究者の関心をひいていないようである。特に大衆性の強いロックやポップ・ミュージックはその大衆性故に割を食っているのではないだろうか。確かに、70年代以降、ある音楽ムーブメントと特定の文学の潮流に共通性、または共時性をあまり見い出せないのは事実かもしれない。とは言え、ミュージシャンの文学への接近や文学的モチーフの使用、さらには作家側から音楽へのアプローチなどが止まった訳ではない。

これまでに行ったりサーチの結果として、予想をはるかに越えた多くのミュージシャン達が、様々な楽曲（曲単位、またはアルバム一枚に渡るようなコンセプト・アルバムなど）に文学作品を取り上げていることが分かった。本稿の第一目的はそのリストを作成し提示することにある。それから、筆者の取ったりサーチ方法とその問題点を検証した上で、どれほど文学とロックとの間に関連性を見出せるのか、つまりはミュージシャン達が自分の作品に文学をいかにして取り上げてきたか——またはその逆のパターンである作家からの文学作品へのアプローチも含めて——を紹介していきたいと考えている。最終的には、このような文学と音楽の接点・接触にどのような意義が見出せるのか、ということにも踏み込んでいきたい。

まず今回のリサーチ方法を検証をする。主として、次に述べる三つの方法を用いて、タイトルから文学と関連のある音楽作品を検索した。さらに、関連した文献を調べたり、実際に音、または歌詞に接するように努めた。

- (1) 筆者の所有しているCDやLP(約2,000枚)からの検索。その中に、文学と関係のあるタイトルが意外にも多数見つかった。このことは、文学作

品がミュージシャンに数多く取り上げられ、かつ、一般大衆に受け入れられていることを反映していると考えられる。

- (2) 市販されている音楽関連の雑誌、本、音楽事典等を使用して検索する、という方法を試した。地域・国・ジャンルごとにロックの事典などが出版されている。従って、本稿末のリストにあるようなかなりマイナーなアーティストや作品さらには英米以外の国の物も探すことが可能だった。これも、例えばアメリカの文学作品が他国で受け入れられ読まれているように、文学が国の枠を超えた広範囲の読者を獲得しているということを実に物語っている。
- (3) インターネットの使用。この検索方法が予想以上に有効だった。これで、事典などでは見つけられなかったものを多数発見することが出来た。アメリカの中古レコード店、レコード・ファインダー (Record Finder) のホームページで20万枚以上のシングルのリストなどもあり、かなり有効な検索手段となった。こうして、マイナーな曲やアーティスト、現在は忘れられてしまった作品などが数多く浮かび上がってきた。

しかし、今回のリサーチ方法には、当初から考えていたように以下のような三つの問題点があった。まず第一に文学作品と音楽との間の関連性があいまいな場合がある。文学作品のタイトルからのリサーチが中心になるため、文学作品と同じタイトルがついていても、実際には作品と音楽の間に何の関係のないことがありうる。つまり、歌詞の内容が分かるまで実際に関連しているかどうか分からないのである。ただし、有名な文学作品名——例えば“The Grapes of Wrath”——が曲のタイトルについている場合、ミュージシャン側がその文学作品から何の影響も受けていないということは考えにくい。加えて、こうした名前のみ同じで内容的にはあまり関係がないという場合でも、「文学の一般への浸透」という側面は見逃せないのも、一概に切り捨ててしまうわけにもいかない。また、ある種のフレーズ——宗教的 (例えば East of Eden) なものや、示唆的なタイトル (例えば sanctuary) など——は文学作品とは関係なく人気が高い。

こういう場合においては、文学作品のタイトルのみが一人歩きしていたり、または単に文学作品とタイトルが重なったというだけで、その文学作品と全く無関係かもしれない。とにもかくにも、実際にレコード等を購入して何らかの資料（レコード・レビュー、インタビューなど）にあたる必要があると言える。

さらに、上記のこととは逆のことも起こり得る。たとえ曲の内容が実際は文学作品の影響を受けていても、曲（またはアルバム）のタイトルが文学作品名と異なっていれば関連があるかどうか判別がつかないのである。従って、実際は我々の興味を引くような音楽が数多く埋もれていると推測できる。曲のタイトルが文学作品名と異なるものも本稿末のリストに10ほど載せてあるが、そういうものは本などに掲載されていたか、ないしはインターネット上での情報によるものである。

さらに三番目の問題点は、リサーチの際に見逃したり、見過ごす文学作品がある、ということである。今回のリサーチは、筆者が以前から知っていた曲、アルバム、グループ、資料から発見できたもの、または「ありそう」と思われる作品名をインターネット上で検索してみたという結果なので、他にも数多くのものがあると思われる。加えて、他言語の場合、日本語ないしは英語の本に曲やアルバムの内容などが詳しく載っていない限りは、関連があるかどうか分からないという限界がある。厳密に言えば、全文学作品と全アルバム、または楽曲を照合しなければ正確なリストは作成できないので、リサーチャーの知識、興味、根気に左右されるのは仕方のないことかもしれない。

以上のようなリサーチを経て数多くの曲を収集することが出来た。実際に、予想以上のグループやシンガーなどが文学作品をモチーフにしているし、単にグループ名が関連しているというものを加えればかなりの数と言える。次に、実際にこれらの音楽と文学の関わりのいくつか代表的な例をあげて、それらをいくつかの類型に分類する。まず文学のほうからの音楽への歩み寄り、つまり作家が音楽の制作に何らかの形で貢献する場合をみてゆく。その際に、作家が音楽制作に関係する、作家本人が音楽を作る、作家が作品に音楽を取り入れる

というケースを考える。その次にミュージシャンからの文学へのアプローチを検証してゆく。ミュージシャンが文学作品をモチーフにして自分の独自の世界を展開する、元になった小説や詩を出来るだけ再現する、という2つのパターンを考える。

I 作家自らが音楽制作に関与するケース

1. 作家本人が関わるケース

(1) Toni Morrison/*Honey and Rue* (1995)

決してロックではないがこうして作家が自ら書いた詩を使うということは、作家本人の意向が直接反映されるので興味深い。モリスンはCDのライナーノーツに掲載されているインタビューで、「言語と音楽の結婚に興味があった」と述べている。また、「(キャスリーン) バトルのような人が解釈し演奏するのを聞く以上のものはない」(5-6)とも語っている。この論文の根幹に関わるような発言である。

(2) Allen Ginsberg

ギンズバーグは特にボブ・ディラン (Bob Dylan) との関係が知られているが、直接彼が詩をディランに提供したかどうかは調べた範囲では分らなかった。しかし、面白いことにパンク・バンドのクラッシュ (The Clash) の1982年に発表された4枚目のアルバム、『コンバット・ロック』(Combat Rock) にギンズバーグが参加しているということが分かっている。さらに、コンサートにも参加している。アルバムでは、直接彼が書いたという説明はなく、バック・コーラスでの参加ということしか書かれていない。しかし、このアルバムでパンク・バンドにありがちな「ぶちこわせ!」というような初期衝動的メッセージしか発することの出来なかったバンドの歌詞が大幅に変化して、深みを帯びたと評価されている。

2. 作家本人が音楽を作るケース

(1) Michael Moorcock

ムアコックはイギリスのSF作家としてはかなり有名らしい。彼は、ホークウィンド（Hawkwind）というイギリスのサイケ・ロック・バンドのメンバーであったこともあるくらいに音楽との関係は深い。その当時グループのメンバーと共にソロ・アルバムを作っている。

(2) Ken Kesey

彼は、60年代のサイケデリック・ムーブメントやドラッグ・カルチャーの喧噪の中、グレートフル・デッド（The Grateful Dead）の援助でサイケ系のアルバムを制作している。

3. 作家側が作品に音楽を取り入れる（取り込む）ケース

(1) 人気グループの歌詞を取り入れる

Best American Short Stories 1995 に収録されているスティーブン・ポランスキー（Steven Polansky）という作家の“Leg”という短篇で、アメリカのメタリカ（Metallica）という有名ヘヴィー・メタル・バンドの詞が効果的に挿入されている。この歌詞が作品解釈の上で重要な役割を果たしている。

(2) 島田雅彦と大友良英のコラボレーション

人気若手作家の島田雅彦が前衛ロックの旗手と言える大友良英をバックにして自らの短編「ミイラになるまで」を朗読している。CDでは俳優、佐野史朗が朗読を担当しているが、札幌で開催されたコンサートでは島田本人が朗読している³。このような組み合わせは、単に、既存の「朗読とそのバックの音楽（演奏）」と考えることが可能かもしれない。しかし、そうい

3 1997年9月28日札幌芸術の森アートホールにての「インターナショナル・ナウ・ミュージック・フェスティバル」でのステージ。10月3日の北海道新聞夕刊で島田雅彦と大友良英のインタビューが掲載されている。島田は「より密接に言葉と音楽が絡み合うようなことができればおもしろい」と述べている。

うものとの決定的な差異は、作品と音楽が不可分のものとなっているという点である。また、ラジオ劇の効果音と考える向きもあるかも知れないが、ここでの音楽は決して効果音として存在しているのではなく、あくまでも音楽としての主張を持っている。そういう点を考慮していくと、朗読を含めた一つのグループの演奏と考えるべきだろう。詩と音楽という結びつきは、ビート系の詩人をみれば分かるように、ない訳ではない。さらに、有名な詩に音楽をつけるという試みが行われている⁴。しかし、こと小説となるとなかなかない。このような作家が音楽とコラボレーションを行うことは新しい表現方法として大きな可能性を秘めていると言える。

II ミュージシャンが作るケース

1. 文学作品をモチーフとして使いながらもミュージシャン本人のストーリーに組み込む

(1) Osanna/「カンツォーネ」"Canzona" (1972年) (イタリア)

(“The Love Song of J. Alfred Prufrock” の音楽化)

この曲が入ったアルバム *Milano Calibro 9* は同名映画のサントラとして制作されている。マフィア絡みのギャング映画らしい。面白いことに、この詩を読む限りではあのプルフロックが恋愛詩になってしまっている。そして、イタリアらしく壮大に愛を歌い上げる歌になっている。

(2) David Bowie/『ダイヤモンドの犬』 *Diamond Dogs* (1974年) (イギリス)
(1984の音楽化)

ライナー・ノーツによるとこのアルバム自体が『1984年』の音楽化を目指したものらしい。確かに“1984”とか“Big Brother”というタイトルの曲が収録されている。ただオーウェル未亡人にミュージカル化のアイディ

4 Sylvia Plath (シルヴィア・プラス) や Emily Dickinson (エミリー・ディッキンソン) の詩に音楽をつけるという試みが既に行われている。

アを拒否されたため、直接的な『1984年』の音楽化にならなかったようだ。

(3) Iron Maiden/「モルグ街の殺人」(1981) (イギリス)

(“Murders in the Rue Morgue” の音楽化)

CDのライナー・ノーツにあるメンバー (Paul DiAnno) のインタビューによると、「パリで女二人が殺されたことについて、男は暗がりを歩いていて、殺されていた女につまづき、殺人があったことを知らせようと大声で人を呼んだまでにはいいが、回りに集まった人たちは彼の体に血がついているのを見て、逆に無実の罪になってしまったストーリー」となる。当時このバンドは、経済的に落ち込んでいたイギリスの不満を持った若者達に絶大な支持を受けていた。サッチャー首相が踏みつけられている絵のジャケットをつくって発売禁止になったほどである。当時の若者のやり場のない怒り、苦しみがこの「モルグ街の殺人」にあらわれていると言える。

(4) Rush/「トム・ソーヤー」(1981) (カナダ)

(*Tom Sawyer* の音楽化)

これも“Tom Sawyer”というタイトルはついているものの、歌詞の中身を確認すると、直接は関係ないことがわかる。しかし、作詞をしたドラマー (Neil Peart) のインタビューによると、“kind of a portrait of a modern day rebel, a free-spirited individualist striding through the world wide-eyed and purposeful”となる。つまりは、トム・ソーヤー的スピリットを受け継いだ現代人というのがこの詞のテーマと言える。

(5) Bruce Springsteen/『ザ・ゴースト・オブ・トム・ジョード』(1995) (アメリカ) (*The Grapes of Wrath* の音楽化)

確かに、タイトルにあるように『怒りの葡萄』からトム・ジョードというキャラクターを拝借しているが、直接的に『怒りの葡萄』のストーリーを使用しているのではない。ただ、トム・ジョードを登場させることで、現代社会と40年前後のアメリカをリンクさせ、アメリカがその当時から何も変わっていないということを描き出している。

2. 元になった作品のストーリーを追う、元の詩を使う

(1) Kate Bush/「嵐が丘」(1978) (イギリス)

(*Wuthering Heights* の音楽化)

あまりにも有名な彼女のデビュー・アルバムからのヒット曲。相当にインパクトの強い曲で、特に独特の高い声で歌われる“*Heathcliff, it's me*”というテーマのリフレインは耳に残りやすい。最近、日本であるテレビ番組の主題歌に使われてた⁵。

(2) Mike Westbrook/*Westbrook Blake* (1980) (イギリス)

(William Blake の *Jerusalem* や *America* や *Song of Experience* からの詩を使用)

ブレイクの詩を直接使用しているが、一つだけではなくいくつかの詩を組み合わせてアルバム全体で使用している。特に、*America* から“*Let the slave*”という部分を取り出してきて、そこに *The Four Zoas* からの数連を組み合わせるという方法をとることで、より強く主張をあわらしているのと言える。

(3) Iron Maiden/「暗黒の航海」“*The Rime of the Ancient Mariner*” (1984) (イギリス)

(*The Rime of the Ancient Mariner* の音楽化)

このグループは1にある「モルグ街の殺人」のような初期の怒りが主体の歌詞から、「文芸路線」へとそのスタイルを変更して行く。とうとうあのコールリッジの“*Ancient Mariner*”を13分という長さの大曲にまとめ上げてしまった。その他にも、“*The Loneliness of the Long Distance Runner*”とか、“*From Here to Eternity*”や“*The Lord of the Flies*”というタイトルの曲も彼らはものしている。この“*Ancient Mariner*”では、曲の途中でオリジナルのコールリッジの詩を使いうまく曲に乗せている。さらには朗読まではさむというサービスぶりで、ひたすらドラマチックに壮

5 日本テレビ系列で放映されている『恋の空騒ぎ』というバラエティー番組。

大に物語を展開してゆく。

(4) The Zombies/「エミリーにバラを」(1968) (イギリス)

(“A Rose for Emily” の音楽化)

フォークナーの「エミリーにバラを」がポップな味付けをされて歌いやすい曲になってしまったという面白い例。直接的には「エミリーにバラを」が再現されているのではないが、作品を知っていればニヤリとしながら歌詞を読めるはずである。

(5) Woody Guthrie/“Tom Joad Part 1” “Tom Joad Part 2” (1940) (アメリカ) (*The Grapes of Wrath* の音楽化)

『怒りの葡萄』発表後わずか数年で録音されている、ということに驚かない人はいないだろう。どちらかと言うと素直に物語をなぞっていると言える。ただし、タイトル通りにトム・ジョードを中心とした物語として再現されている。

(6) Camel/*Dust and Dreams* (1991) (イギリス)

(*The Grapes of Wrath* の音楽化)

上記二つの『怒りの葡萄』関連の音楽作品とは違い、始めから『怒りの葡萄』全体を音楽化する事を目標としているのが曲のタイトルから分かる。他のグループやシンガーが歌詞に重きを置いているのに対して、このアルバムではグループの演奏が主体である。従って、『怒りの葡萄』のエンディングに近い洪水の場面には歌詞はなく演奏でその様子を表現している。

(7) Alan Parson's Project/*Tales of Mystery and Imagination: Edgar Allan Poe* (1976) (イギリス) (ポーの短編数編を音楽化)

オリジナルのLPは見開きでありかつ、ポーの短編に基づいたモノクロの美しい写真が数葉付いている。さらにはポーの年表まで付いているという豪華さを誇る。このアルバム自体がポーの短編をモチーフにした一つの芸術とも言うべきものである。CD全盛時代の今でもオリジナルの形での再発が望まれる一枚である。

上記の類型や本稿末のリストを見れば、ミュージシャンの間で人気の高い作家・作品のあることが分かる。また、このように様々な種類の文学作品が世界各国で取り扱われていることも分かる。ここから「音楽と文学の関連性」というテーマの中でいくつかの結論を導き出すことができるだろう。

まず、このような多様な文学と音楽の結びつきは、文学の大衆化という事実を反映していると言っていいだろう。ファンタジーやSF系の作品の音楽化が多いというのは理解できる。特に、『指輪物語』で有名なトルキンの作品はミュージシャンによる使用頻度が高い。これは、一般的に人気の高い作品であるということとともに、アルバム一枚単位で音楽化し、壮大な作品を創るのに適しているからだと考えられる。また、ジョージ・オーウェルの『1984年』も人気が高い。これも何らかのコンセプト・アルバムを作ろうとしたときにテーマとなりやすいということが考えられる。さらにはシェイクスピアの作品が取り上げられる回数が多いということも納得しやすい。リストにはあまり載せていないが、シェイクスピア作品の人气がさすがに高い。例えば、ブライアン・フェリー (Brian Ferry) によるシェイクスピアのソネットを歌った曲があのだIANA妃のトリビュート CD に入っている⁶。シェイクスピアの場合は、一般への浸透度が他の作品よりはかなり高いと考えられるので、多くの音楽家に取り上げていても不思議ではないだろう。しかし、これらの上記の作品と比較すれば、とにかく「お堅い」イメージがある文学作品、例えばフォークナーの「エミリーへのばら」というような作品まで音楽化されているということを考えると、人気や「壮大なテーマ」とは縁遠い作品までもがミュージシャンの対象になっていることが分かる。言い換えれば、作品の、または文学の一般大衆への浸透度が深いということが言えるだろう⁷。

6 『ダイアナ・トリビュート』というタイトルでソニー・レコーズから出た。レコード番号はSRCS 8555~6。ブライアン・フェリーはシェイクスピアのソネットの18番を歌っている。

7 また、別の角度から見れば、音楽が文学の大衆化に一役買っているという言い方も可能だろう。作品を広範な人々に広める効果が考えられる。例えば、日本でスプリングスティーンやキャメルのアルバムがきっかけに『怒りの葡萄』の翻訳のセールスは上がった

また、文学作品が音楽と一つになることで、読者のイメージを喚起するということが考えられる。つまり、作品と読者との間の関係に影響を及ぼすということが言えるだろう。例えば、ギンズバーグなどのビート詩人等の朗読なども一つの音楽と考えれば同じ範疇にはいるだろう。事実、彼の朗読は聴衆に力強い鮮烈なイメージを残すものである。しかし、そこに音楽が加わればどうなるだろう。コンサートを見れば分かるように、ポピュラー音楽は「人を物理的に動かす「力」」を持つ。つまり、音楽は「魔術性の狂気」を持っていると言うことが可能である⁸。作品の朗読に加えこのような音楽があることで、聞く側は朗読では得られない広範なイメージを持ち、想像力をたくましくすることが出来る。つまり、言葉に本来備わっている力強さを引き出すことが可能となるのではないか。これが、モリスンが求めていた「言語と音楽の結婚」ということなのだろう。島田雅彦は自分の作品の朗読と音楽の一体化がもたらす効果について、前出のCD『ミイラになるまで』のライナー・ノーツにある文章で、以下のように書いている。

彼 [大友良英] が組織したアンサンブルもまた、奇怪だった。聴く者の居心地を悪くさせる不思議な響きに佐野史朗のとぼけた声加わると、なぜかこの悲惨な話はユーモアを引き寄せた。そして、どうにも笑わずにはいられなくなる。

作品を読むことだけからは見えてこないはずの「ユーモア」がこの融合によって初めて表面化するということを作家である島田本人が認めている。

たということはないだろうか。本の売り上げに関する正確なデータはない。しかし、CDの解説にはどちらも「スタインベックの『怒りの葡萄』』という説明がある上に、特にスプリングスティーンは大新聞や雑誌でも紹介されている。ファンや作品（曲・アルバム）を気に入った人が小説を読みたいと思っても不思議ではない。若者の活字離れが特に言われる昨今では、音楽と結びつくというのは特に有効なセールス源とは言えまいか。

- 8 1997年3月8日の朝日新聞朝刊の近藤康太郎による「探求：記者の目：ポピュラー音楽の産業化：人を動かす魔術性が消える」という記事より。記者は、スプリングスティーンとボブ・ディランのコンサートがそれぞれアコースティック・ギター一本の弾き語りなのに、客が自然発生的に体を動かすようになるという様子から、「音楽の力」を実感している。

『フィネガンズ・ウェイク』の音楽化に成功したフィル・ミントン・クアルツェットの一人であるピアニストの Veryan Weston は音楽の文学にもたらす効果についての的確な表現をしている。

We chose to use texts from *Finnegans Wake* because there was a natural affinity with our own musical interests. The music we make comes from exploring different qualities of sound from moment to moment. Similarly, with *Finnegans Wake* the first thing you get is the sound quality of the words rather than the narrow, literal meaning. The words really come to life off the page when spoken, sung, shouted, spluttered, spewed, screeched, screamed or skrimlatted.

つまり、彼らの即興演奏がジョイスの文体と調和するものであり、加えて、演奏されることによってさらに言葉が生き生きとしてくるのである。また、キャメルの『ダスト・アンド・ドリームス』は歌詞と音楽、さらにはブックレットの写真も含めてトータルに作られているので、リスナーが作品に入ってゆきやすい。このように音楽と一体化することでいっそうの高揚感が得られるのではないか。

続いて、文学作品はミュージシャンの創造心をインスパイアするものであるということが重要となる。分かりやすい例はエドガー・アラン・ポーの人気ぶりだろう。これはポー作品が、音楽を作る側のイマジネーションを刺激しやすい作品と考えていいのではないか。ポー以外にもミュージシャンの創造心を刺激した例がいくつも見受けられる。ジェファーソン・エアプレーン (Jefferson Airplane) のボーカルのグレイス・スリック (Grace Slick) は「アリス」の世界に「薬」の臭いを嗅ぎ取り “White Rabbit” という曲をつくっている⁹。また、

9 『不思議の国のアリス』に関する特集を組んだアメリカのテレビ番組で彼女が出演して証言している。日本では『グレート・ボックス — 不思議の国のアリス』というタイトルでNHKで放映された。“White Rabbit”は彼らの1967年に発表された2枚目のアルバム、*Surrealistic Pillow*に収められている。

アメリカのテキサス・ローカルのロック・グループ、Pervis のメンバーは『怒りの葡萄』を「陰鬱だ」（“dark and moody”）と感じて曲を作っている¹⁰。さらに言えば、ブルース・スプリングスティーンが『ザ・ゴースト・オブ・トム・ジョード』で『怒りの葡萄』との関連を必要としたのは、現代社会と作品、そして30～40年代を結びつけアメリカにおける問題性をあぶりだす、という効果を生み出すためである。

つまり、文学作品から音楽作品を生み出すことは、その演奏者による文学作品の独自の解釈の提示だと言える。直接、詩をそのままメロディーに乗せるのではなく、その一部を使用したり、小説を音楽化した場合には必ずそのミュージシャンの意図が加わる。たとえ、詩をそのまま使用しても、音楽により雰囲気固定することができるので、その時点でミュージシャンの意図が加えられるとも言える。特に、小説を音楽化する場合には作品の全てを歌にするといことは不可能なので、ミュージシャン側が自分の意図に従って改編したり縮めたりする。島田雅彦の短編とのコラボレーションを行った大友良英は以下のように自分の音楽の持つ意味合いについて、「この強力なテキストに対峙する即興演奏と、それをリミックスする私の手腕と、作品の構造そのもので、テキストに対する相対化が図れればと思った」と書いている。さらに、「私達即興演奏家のある種突き放した演奏が、この男への伴奏に終わらず、別の意味を持っていることを願って」いるとも書いている¹¹。音楽が作品と密接に絡みあうことで、新たなものが生まれてくるということを願っているクリエイターの姿がここには見いだせる。このような文学と音楽の結びつきは、一つの文学作品の解釈として、我々文学研究者にも何がしかのヒントを与えてくれるはずである。ひいては文学研究に新たな一面を与えるものだろう。

10 筆者とパーヴィスのメンバーとの1998年5月22日のメールのやりとりで、メンバーが証言している。

11 前出のCDのライナー・ノーツにある文章からの言葉。

国内文献

- 赤岩和美, 大鷹俊一, 小川隆夫編集『Beatle Vibrations: ビートルズのフォロワーたち』東京, 音楽之友社, 1998年
- ディアノ, ポール トシ矢嶋とのインタビュー ライナーノーツ 『キラーズ』アイアン・メイデン音楽 CD, 東芝EMI, 12月29日1981年
- ディッキンソン, ブルース 伊藤政則とのインタビュー ブックレット 『ケミカル・ウェディング』 ブルース・ディッキンソン音楽 CD, Victor
- フルズ・メイト編集 『フルズ・メイト: スペシャル・ストック パート2』東京, フルズ・メイト, 1981年
- 井上立人 『Orange Power 1996: 辺境地通信 special』 1996年
- 井上立人 『Orange Power vol. 2』 1997年
- 近藤康太郎 「表紙の人: ブルース・スプリングスティーンさん」 『アエラ』4月7日1997年: 76.
- 近藤康太郎 「ポピュラー音楽の産業化」 『朝日新聞』 3月8日1997年
- 近藤康太郎 「ロックの『ボス』の変節か」 『朝日新聞』 2月8日1997年
- 草野正 「Music Treasure/ライブレポート, ブルース・スプリングスティーン」 『産経新聞』 1月29日 1997年
- 松本昌幸編集 『アメリカン・ロック集成』 東京, マーキームーン社, 1995年
- 松本昌幸編集 『フレンチ・ロック集成』 東京, マーキームーン社, 1994年
- 松本昌幸編集 『ジャーマン・ロック集成』 東京, マーキームーン社, 1994年
- モリスン, トニ マシュー・ガーウィッチとのインタビュー ブックレット 『Honey and Rue』 キャスリーン・バトル歌 CD, ポリドール
- 大友良英 ライナーノーツ 『ミイラになるまで』 島田雅彦・大友良英音楽 CD, クリエイティブマン・ディスク
- パーソンズ, アラン 吉田香織とのインタビュー 『ストレンジ・デイズ』 2号, 1999年, 81-84.

文学とポピュラー音楽 (加藤隆治)

- ロック・ダイヴィング・マガジン編集 『ラビリンス・英国フォーク・ロックの
迷宮』 東京, 白夜書房, 1997年
- ローゼン, スティーブン 『ロックンロールの囚人』 田中雅子, 城山隆共訳
東京, Tokyo FM 出版, 1996
- 渋谷陽一 ライナーノーツ 『コンバット・ロック』 ザ・クラッシュ音楽 LP,
エピック・ソニー
- 島田雅彦 ライナーノーツ 『ミイラになるまで』 島田雅彦・大友良英音楽.
CD, クリエイティブマン・ディスク
- 島田雅彦 梁井朗とのインタビュー 『絡み合う小説と音楽』 10月3日1997
年
- 信貴朋子 ライナーノーツ 『ダイヤモンドの犬』 デビッド・ボウイ音楽
CD, 東芝EMI
- 鈴木カツ編集 『アート・オブ・フォーキー』 東京, 音楽之友社, 1998年
- 田口史人, 湯浅学, 北中正和編集 『日本ロック&フォークアルバム大全,
1968~1979』 東京, 音楽之友社, 1996年
- ウィリアムズ, リチャード 『果てしなき旅 (*Dylan: A Man Called Alias*)』
菅野ヘッケル訳 東京, 大栄出版, 1993年
- 山崎尚洋編集 『ブリティッシュ・ロック集成』 東京, マーキームーン社, 1990
年
- 山崎尚洋編集 『ユーロ・ロック集成』 東京, マーキームーン社, 1987年

海外文献

- Camerlo, Marcelo. *The Magic Land: A Guide to South American Beat, Psychedelic and Progressive Rock 1966~1977*. Madrid, Spain: Kliczkowski Publisher, 1998.
- Freeman, Steven, and Freeman, Allan. *The Crack in the Cosmic Egg: Encyclopedia of Krautrock, Kosmische Musik, and Other Progressive*,

- Experimenta, and Electronic Musics from Germany*. Leicester, England: Audion Publications, 1996.
- Joynson, Vernon. *The Tapestry of Delights: A Comprehensive Guide to British Music of the Beat, R & B, Psychedelic and Progressive Era (1963~1976)*. 2nd ed. Glasgow, Scotland: Borderline Productions, 1996.
- . *Fuzz, Aid, and Flowers: A Comprehensive Guide to American Garage, Psychedelic and Hippie Rock (1964~1975)*. 4th ed. Glasgow, Scotland: Borderline Productions, 1997.
- Peart, Neil. Interview. *Rush Backstage Club Newsletter*. December (1985).
- Polansky, Steven. "Leg." *The Best American Short Stories 1995*. Ed. Jane Smiley. Boston: Houghton, 1995. 80-93.
- Strong, Martin C. *The Great Psychedelic Discography*. Edinburgh: Canongate Books, 1997.
- Weston, Veryan. Interview with John Corbett. Booklet. *Mouthfull of Ecstasy*. CD. Victo, 1996.

作品国別作家別リスト

*は購入済み

○インスト曲（ただし分かっている場合のみ）

また、購入したものはオリジナル・再発、LP/CDの区別とレコード番号を加えた

I ドイツ

1. ヘルマン・ヘッセ：『ピクトールの変身』

(1)*Anyone's Daughter/*Pictors Verwandlungen* (独) (1981)

(original/LP) (Spiegelei INT 145 624)

実はライブだが、LPの最後になるまで拍手・歓声は聞こえない。歌詞の内容は分からないが、演奏はひじょうにテクニカルで感動的である。

(2)*David Sancious/"Pictor's Metamorphosis" (米) (1976)

(original LP) (Epic PE 33939)

こちらはアメリカのキーボーディストのインスト作品。こちらも壮大な音世界である。

2. ニーチェ

(1)*Museo Rosenbach/*Zarathustra* (伊) (1973)

(Japanese LP reissue in 1982) (King K22P-280)

(2)**Zarathustra*/self title (独、グループ名) (1971)

(CD reissue in 1995) (Second Battle SB029)

(3)*Zara-Thustra* (独、グループ名)

3. ノヴァーリス

(1) *Novalis* (独、グループ名)

歌詞のいくつかに彼の詩を採用している。

4. ヘルダーリン

- (1)*Hölderlin/*Höderlins Traum* (独) (1972)
(LP reissue)

II イギリス

1. Willam Blake

- (1)*Mike Westbrook/*The Westbrook Blake* (英) (1980)
(US press LP) (Europa Records JP2006)

Jerusalem や *America* や *The Four Zoas* からの抜粋や、*Song of Experience* から “A Poison Tree”、“Holy Thursday”、“London” (“London Song” というタイトルの曲になっている) を用いている。

- (2)*Tangerine Dream/*Tyger* (独) (1987)
(Japanese press CD) (Warner 32XB-224)

ドイツの有名エレクトロニクス・ミュージックの先駆者である彼らが、ブレイクの “Tyger” “London” “America” (抜粋) “The Fly” “The Smile” などの歌詞を使用して作ったアルバム。彼らの有名な初期の作品と比較すると格段に聞き易い。

- (3)*Bruce Dickinson/*The Chemical Wedding* (1998) (英)
(Japanese press CD) (Victor VICP-60468)

“Book of Thel” “Gates of Urizen” “Jerusarem” という曲などが収録されている。また、ジャケットやインナーにブレイクの絵を多数用いている。ブルースは錬金術というテーマを調べていくと必然的にブレイクに到達した、と証言している。



Bruce Dickinson/*The Chemical Wedding*

(4)*Strawbs/*Grave New World* (1972) (英)

(CD reissue in 1998) (A&M 540 934-2)

タイトルは当然ハクスレーの *Brave New World* のもじりである。“New World”という曲は同作と関連がある。その他の曲にはブレイクの詩が使われている。また、ジャケットもブレイクの絵である。

(5)*Loreena McKennitt/*Elemental* (1985) (Canada)

(CD reissue in 1994) (Quinlan Road QRCD101)

エンヤと比較されるカナダの代表的な女性歌手、ロレーナ・マッケニットの記念すべきデビュー・アルバム。ここで彼女はトラッドにまじりブレイクの “King Edward the Fourth” を “Lullaby” というタイトルにかえて演奏している。彼女はスキヤットのみだが、詩の朗読を含んでいる。そ

の他にもイエイツの詩を用いている。

2. Emily Brontë

(1)*Kate Bush/“Wuthering Heights” (英) (1978)

(Japanese press LP) (Toshiba EMI EMS-81042) 本文参照

(2)*Angra/“Wuthering Heights” (Brasil) (1993)

3. Anthony Burgess

(1) Clockwerk Orange/*AbraKadabra* (独、グループ名) (1975)

4. Lewis Carroll

(1)*Jefferson Airplane/“White Rabbit” (米) (1967)

(CD reissue in 1995) (BMG Victor BVCP-7351) 本文参照

Chicken Shed/*Alice* (1977)

その名の通り『アリス』を元にしたアルバムらしい。

(2)*Tom Petty/“Don't Come Around Here No More” (米) (1985)

(Japanese press CD) (MCA MVCM-407)

ビデオ・クリップでは、マッド・ハッターに扮したトム・ペティとアリスの演技が歌詞とマッチして面白い仕上がりになっている。

(3) Francois Wertheime/*Alice Au Pays Des Merrveilles* (仏) (1978)

5. Samuel Taylor Coleridge

(1) Kubla Khan (米、グループ名) (196?)

(2)*Iron Maiden/“Rime of the Ancient Mariner” (英) (1984)

(Toshiba EMI TOCP-6341)

6. Joseph Conrad

(1)*Iron Maiden/“Lord of Flies” (英) (1995)

(EMI 7243 8 35819 2 4)

7. T.S. Eliot

(1)*Osanna/“Canzona” (伊) (1972) 本文参照

(2)*The Mission/“Wasteland” (英) (1986)

(Mercury 830 603-2)

8 . Aldous Huxley

(1) Brave New World/*Impressions on Reading Aldous Huxley* (独) (1972)

9 . James Joyce

(1) Finnegan's Wake (米、グループ名、シングルのみ、60年代末)

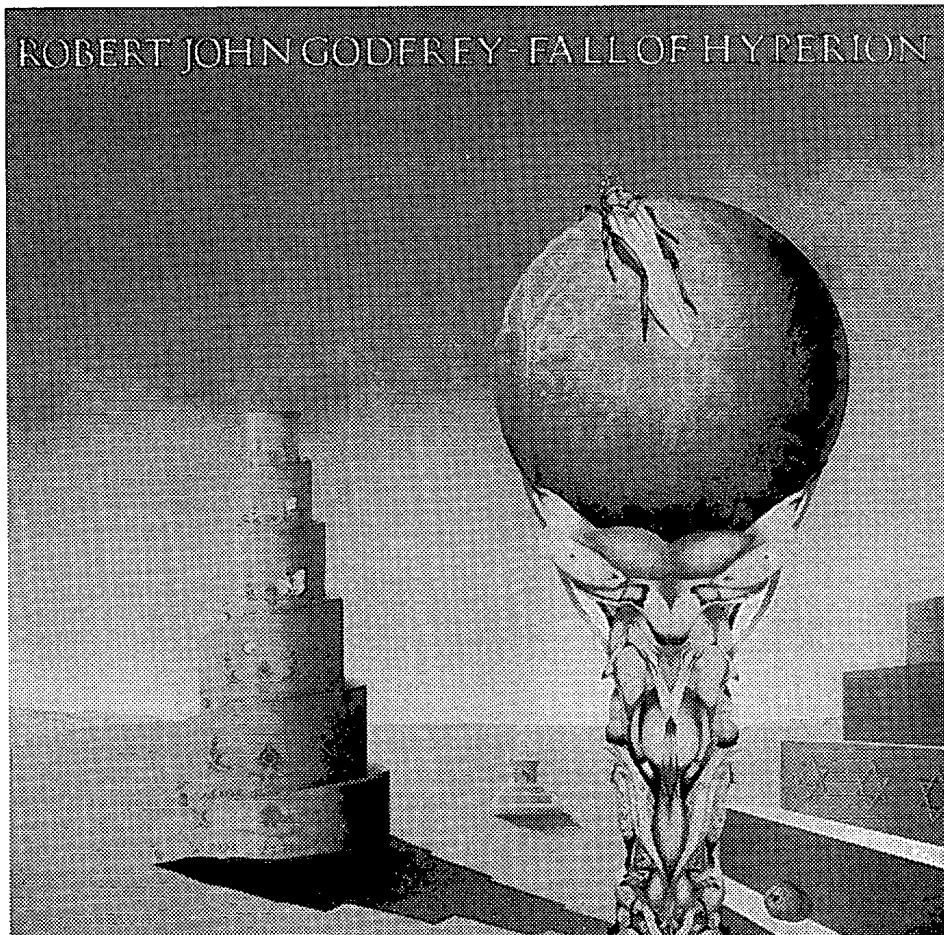
(2) Finnegan's Wake/*Yellow* (Belgian, グループ名) (1996)

(3)*Phil Minton/*Mouthful of Ecstasy (Finnegan's Wake)* (英/カナダ)
(Victo cd 041)

10. John Keats

(1)*Robert John Godfrey/*Fall of Hyperion* (英) (1974)

(Japanese reissue LP in 1978) (Nippon Phonogram BT-5167)



Robert John Godfrey/*Fall of Hyperion*

(2)*Keats (英、グループ名)

(3)*葛生千夏/*The Lady of Shalott* (1992)

(CD) (Salisbury Adisc-SAL0002)

彼女のセカンド・アルバム。ポーの“To Hellen” “The Haunted Palace”
以外に、テニスンの“The Lady of Shalott” “Elaine the Fair”、キーツ
の“Isabella” などもある。

11. C.S. Lewis

(1) Narnia/self title (英) (1974)

(2)*Narnia/*Awakening* (Sweden、グループ名) (1997)

(3)*Eden/*Perelandra* (独) (1980)

(original LP) (Eden Musik EM 20 001)

12. Arthur Machen

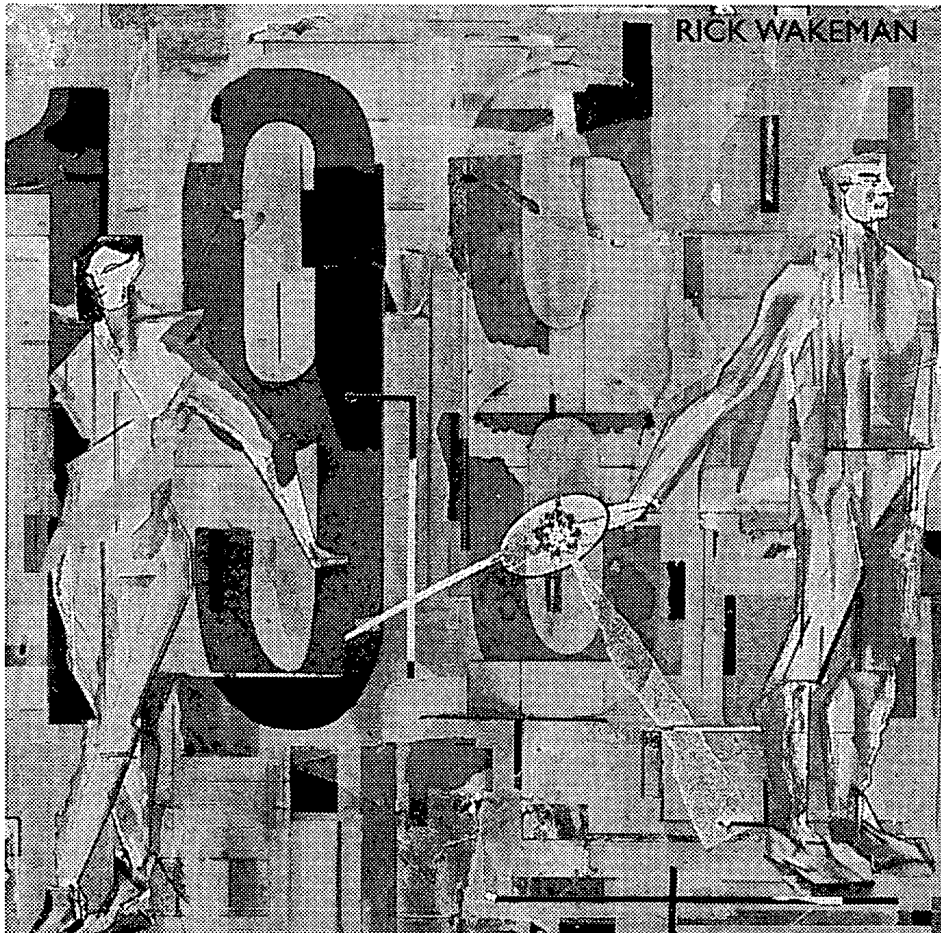
(1)*Kenso/『夢の丘』(*The Hill of Dreams*) (日) (1991)

13. Michael Moorcock

(1) Michael Moorcock & the Deep Fix (英、本人の作品) (1975) 本文参照

14. George Orwell

- (1)*Rick Wakeman/*1984* (英) (1982)
(Japanese press) (Polystar 24S-41)



Rick Wakeman/*1984*

- (2)*David Bowie/ "1984" (英) (1974)
(CD reissue in 1996) (Toshiba EMI TOCP-8867) 本文参照
- (3)*Anthony Phillips/*1984* (英) (1981)
(original LP) (RCA LP 5036)
- (4) Hugh Hopper/*1984* (英) (1973)
- (5) Ensemble Data/*Animal Farm (Loomade Farm)* (Estonia) (1990)
- (6)*David Peel & the lower eastside/*1984* (米) (1990)

(Czech press LP) (210007-1311)

アメリカのサイケ時代からの生き残りの彼だが、何故かこのアルバムは、面白いことにチェコ盤のようである。

15. Harold Pinder

(1)*Michael Mantler/*Silence* (英) (1977)

(original LP) (WATT /5)

16. Julian Jay Savarin (自らの作品を音楽化)

(1) Julian's Treatment/*A Time before This* (英) (1970)

(2)*Julian Jay Savarin/*Waiters on the Dance* (英) (1971)

17. William Shakespeare (実際はもっとあると思われます)

(1)*Shylock (仏、グループ名)

(2)*Falstaff (仏、グループ名)

(3) Red Jasper/*A Winter's Tale* (英) (198?)

(4) Steve Hackett/*Midsummer Night's Dream* (英)

(5) Mauro Pagani/*Sogno Di Una Notte Destate* (伊) (1981)

(*Midsummer Night's Dream*)

(6)*Loreena McKennitt/"Cymbeline" (Canada) (1991)

(CD) (WB 9 26880-2)

Merchant of Venice/self title (?) (?)

18. Allan Sillitoe

(1)*Iron Maiden/"The Lonliness of the Long Distance Runner" (英) (1986)

(1997 Toshiba EMI TOCP-3066)

19. Bram Stoker

(1) Bram Stoker/*Heavy Rock Spectacular* (英、グループ名) (1972)

20. Alfred Lord Tennyson

(1)*Loreena McKennitt/*The Visit* (Canada) (1991)

(CD) (WB 9 26880-2)

ロレーナはこの4作目ではテニソンの "The Lady of Shalott" を取り

上げている。

- (2)*葛生千夏/*The City in the Sea* (日) (1991)

(CD) (Salisbury Adisc-SAL0001)

ポーの詩を歌った曲の他に、テニスンの“The May Queen” “The Voyage”、シェイクスピアのソネットの113番 “Since I Left You” なども収録されている。

- (3)*葛生千夏/*The Lady of Shalott* (日) (1992)

(CD) (Salisbury Adisc-SAL0002)

彼女のセカンド・アルバム。ポーの“To Hellen” “The Haunted Palace” 以外に、テニスンの“The Lady of Shalott” “Elaine the Fair”、キーツの “Isabella” などもある。

21. J. R. R. Tolkien

- (1)*Bo Hansson/*Lord of the Rings* (Sweden) (1970)

(CD reissue in 19??) (One Way Records OW 33654)

- (2)*Isildurs Bane/*Sagan Om Ringen* (Sweden) (1988)

(LP) (Isildur Records IRLP 000 88)

- (3) Gandalf/*Visions* (オーストリア) (1982) (『指輪物語』)

- (4)*Yavanna/*Bilder Aus Mitteleerde* (独) (1984)

(original LP) (LORD 33 545)

『シルマリリオン』より。

- (5) Khazad Doom (米、グループ名)

トールキン作品に出てくる都市の名前からとられたグループ名。

- (6)*Marillion (英、グループ名)

元々グループ名は「シルマリリオン」だったらしい。それをちぢめて「マリリオン」となる。

- (7)*Galadriel/*Muttered Promises from an Ageless Pond* (スペイン、グループ名) (1988) (DAGA Discos LP0005)

22. H.G. Wells

(1)*Allan Parsons/*The Time Machine* (英) (1999)

(CD) (HORIPRO XYCA-00041)

アラン・パーソンズの最新作である。今回は SF の名作に着想を得たものとなっている。

23. Oscar Wilde/*The Picture of Dorian Gray*

(1)*Shadowland/"Dorian Gray" (英) (1992)

(CD) (Zero Corporation XRCN-1093)

(2)*Dorian Gray/*World of Life* (独、グループ名) (1995)

(CD) (Victor VICP-5503)

(3) Il Ritratto di Dorian Gray (伊、グループ名)

24. W. B. Yeats

(1)**Now and in Time to Be: A Musical Celebration of the Works of W. B. Yeats* (Ireland) (1997)

(CD) (Grapevine OMCX-1017)

いわゆるトリビュート物と考えていい CD。Van Morrison (ヴァン・モリソン) や The Cranberries (クランベリーズ) の曲と共に、イエイツ本人の詩の朗読も含む。

III アメリカ

1. Edward Albee

(1)*Sigmund Snopek III/*Who's Afraid of Virginia Woolf?* (1973)

(CD reissue in 1994) (WMMS 042)

2. Ray Bradbury

(1)*The Enid/*Something Wicked This Way Comes* (198?)

(original LP) (ENID 3)

(2)*Solaris/*Marsbeli Kronikak* (Hungary) (198?)

(original LP) (START SLPM 17819)



Solaris/Marsbeli Kronikak

(3) *The Liverpool Scene/Amazing Adventures of* (英) (1968)

詳細は分からないが、ブラッドベリの作品をモチーフにした曲があるらしい。

3. William Burroughs

(1) *Soft Machine* (英、グループ名)

4. Stephen Crane

(1)**Danko, Fjeld, Anderson/"Blue Hotel"* (米) (1994)

(CD) (RYKO VACK 1001)

(2) *Red Badge of Courage* (ケルト系? グループ名)

5 . Theodore Dreiser

- (1) Leonard & Hildebrand/“Sister Carry” (米) (199?)

6 . William Faulkner

- (1)*The Zombies/“A Rose for Emily” (英) (1968)

(CD reissue in 1993) (Teichiku TECX-20496) 本文参照

- (2) The Hitmen/*Light in August* (米) (1997?)

- (3) Cartoon/“Light in August” (米) (1983)

- (4) Lionel Newman/“Sound and the Fury” (米) (?)

- (5) Philip Rambow/“Sound and Fury” (米) (?)

- (6) Platters/“Sound & the Fury” (米) (?)

- (7)*Iron Maiden/“Sanctuary” (英) (1981)

(CD reissue in 1987) (Toshiba EMI CP32-5107)

7 . F. S. Fitzgerald

- (1) Dave Koz/*Tender Is the Night* (米) (?)

- (2)*Jackson Brown/“Tender Is the Night” (米) (1983)

(Japanese CD reissue in 1996) (Asylum WPCR-667)

- (3)*Frank Marino/“Babylon Revisited” (加) (1990)

(Japanese press CD) (ALPHA Record ALCB 728)

- (4)*Ric Ocasec/*This Side of Paradise* (米) (?)

(original LP) (GEFFEN GHS 24098)

- (5) Ultravox/“This Side of Paradise” (英) (?)

- (6) Smokie/“This Side of Paradise” (米) (?)

- (7)*Manfred Mann’s Earth Band/“This Side of Paradise” (英) (1976)

(Japanese CD reissue in 1990) (Century Records CECC-00123)

8 . Allen Ginsburg

本文参照

9 . Ernest Hemingway

- (1)*The Old Man & the Sea/self title (Denmark) (1971)

(CD reissue in 199?) (Shanty 1001)



The Old Man & the Sea/self title

(2)*Anekdoten/"The Old Man & the Sea" (Sweden) (1993)

(Virta 001)

(3)*The Colour of Memory/"The Old Man and the Sea" (Scotland) (1994)

(IONA IRCD 028)

(4) Dimitri Tiomkin/"Old Man & the Sea" (米) (?)

(5) Fred Rose/"The Old Man of the Sea" (米) (?)

(6) Behemoth/"Old Man of the Sea" (米) (199?)

(7) Red Krayola/*Farewell to Arms* (米) (1995?)

(8) Les Baxter/"A Farewell to Arms" (米) (?)

- (9) Benton Ames/"Farewell to Arms" (米) (?)
- (10) Jean Martin/"Farewell to Arms" (米) (?)
- (11) Roberta Sherwood/"Farewell to Arms" (米)
(50~60年代カントリー?)
- (12) Dave Dudley/"Farewell Two Arms" (米) (?)
- (13) Dick Darmon/"Farewell to Arms" (米) (1990)
- (14)*Emerson, Lake & Palmer/"Farewell to Arms" (英) (1992)
(CD) (Essential Records ESM CD 506)
- (15) The Sun Also Rises/self title (英) (1970)

ごく最近になって再発されたようだ。入手できなかったのが、メンバー二人の性がヘミングウェイであるためこういうバンド名になったのではないか。

- (16)*Metallica/"For Whom the Bell Tolls" (米) (1984)
(CD) (CBS Sony 25DP 5340)
- (17)*Bass Addiction/*For Whom the Bass Tolls* (米) (1994)
(Pandisc PDD-8849)

Bass Addiction なるテクノ・ベースのプロジェクトによる、『誰がためにベースは鳴る』というアルバム。

10. Nathaniel Hawthorne

- (1) Scarlet Letter (米、グループ名、South Florida)

11. Washington Irving

- (1) Rip van Winkle (米、グループ名、50~60年代)

12. Henry James

- (1) Hail/*Turn of the Screw* (米) (1991)
- (2)*Dirty Looks/*Turn of the Screw* (米) (1989)
(original LP) (Atlantic 81992-1)
- (3) Contagion/*Turn of the Screw* (米) (?)

13. James Jones

- (1)*Iron Maiden/“From Here to Eternity” (英) (1992)
(US press CD) (Castle 111-2)

14. Ken Kesey

- (1) Ken Kesey/*The Acid Test* (米) (1967)
作家本人による実験的作品。

15. Jack London

- (1) D.A.D. (Dreams A Circle)/*Call of the Wild* (米) (?)
(2) Disneyland after Dark/*Call of the Wild* (蘭) (1986)
(3)°*Neil Schon/“Call of the Wild” (米) (1995)
(CD) (Higher Octave Music HOMCD 7073)
インスト曲だが、曲の冒頭に狼の鳴き声が入っている。
(4) Arron Tippin/*Call of the Wild* (米) (1993)
(5) Chris Ledoux/“Call of the Wild” (?) (?)
(6) Last Call/*Call of the Wild* (米) (1996)
(7) Susan Ashton/“Call of the Wild” (米?) (1993?)
(8)*Deep Purple/“Call of the Wild” (英) (1991)
(Japanese press CD) (Polydor POCP-2287)

16. H. P. Lovecraft

- (1)*Necronomicon/*Tips Zum Selbstomord* (独、グループ名) (1972)
(2) H. P. Lovecraft (米、グループ名) (1967~75)

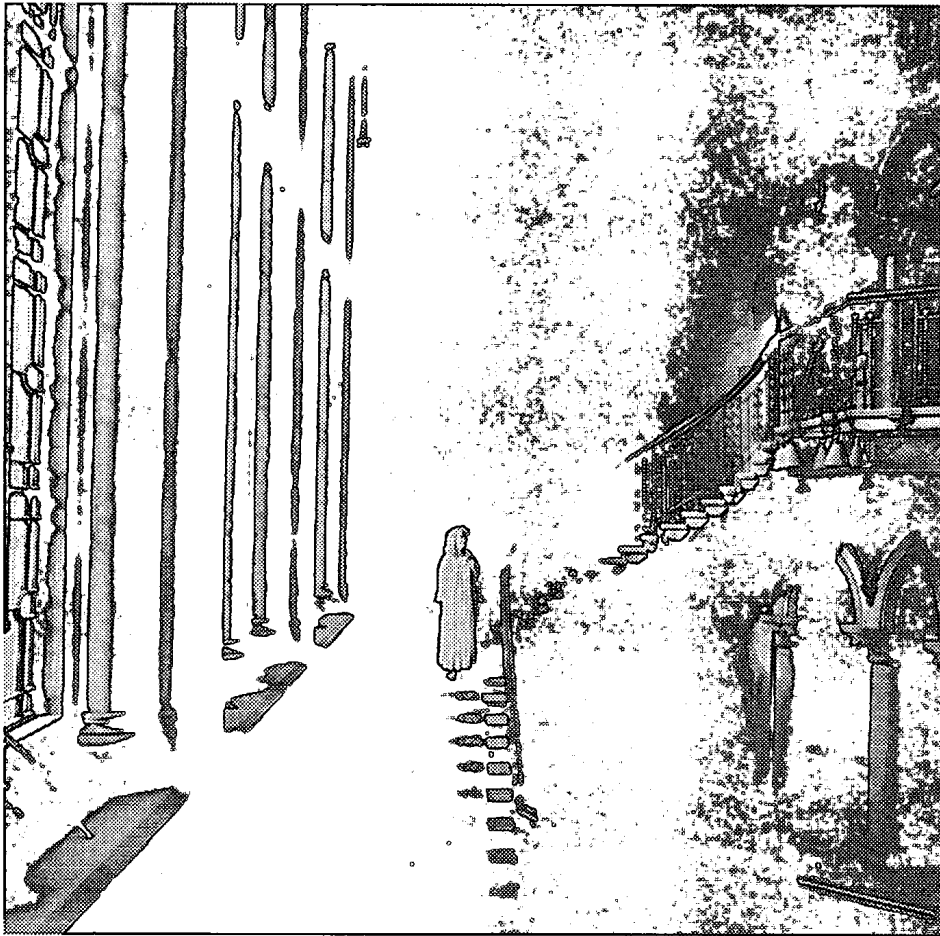
17. Herman Melville

- (1) Frankie Laine/“Moby Dick” (米) (?)
(EP) (Columbia J4-276)
子供向けに作られた曲なので、楽しく歌われている。
(2)°*Led Zeppelin/“Moby Dick” (英) (1976)
(CD reissue in 1997)
(East West Japan AMCY-2439~40)

- (3)*Nino Ferrer/“Moby Dick” (仏) (197?)
(CD reissue in 1998) (5758619-12Y)
- (4) Banco/“Moby Dick” (伊) (1983)
- (5) Steve Goodman/“Moby Dick” (米) (?)
- (6)*Nick Woods/“Ballad of Billy Budd” (米) (?)
(EP) (Joey Records JY-1009-R)
- (7)*Morrissey/“Billy Budd” (英) (1994)
(Toshiba EMI TOCP-8075)

18. Edgar Allan Poe

- (1) Peter Hammill/*The Fall of House of Usher* (英) (1991)
- (2)*The Alan Persons Project/*Tales of Mystery and Imagination Edgar Allan Poe* (英) (1976) 本文参照



The Alan Persons Project/*Tales of Mystery and Imagination* のブックレットの写真より “The Fall of the House of Usher”

(3)*The Alan Persons Project/“The Gold Bug” (英) (1980)

(Japanese press LP) (ARISTA 25RS-107)

(4)*Michael Romeo/“Cask of Amontillado” (米) (1994)

“Masque of the Red Death”

“The Premature Burial”

(5)*Wanietula/*A Dream within a Dream* (独) (1983)

(original LP) (KK 2811-018)

ポーの “Alone” “The Valley of Unrest” “Dream-Land” “A Dream within a Dream” などを用いている。

(6) Tiananmen/“The Tell-Tale Heart” (独) (199?)

(7)*Ikarus/self title (独) (1971)

(CD reissue in 1995) (Second Battle SB 032)

“Raven”の一部を用いた曲を演奏している。

(8)*Iron Maiden/“Murders in the Rue Morgue” (英) (1981)

(CD) (Toshiba EMI CP32-5107)

(9)*E. A. Poe (伊、グループ名)

(10) The Glass Prism/*Poe through the Glass Prism* (米) (1969)

This album is an attempt to set poems by Edgar Allan Poe to a rock format. Although they don't pull it off the music isn't bad on cuts like The Raven. (*Fuzz, Acid and Flowers* 457)

(11)*POE/Hello (米) (1996)

(Japanese press CD) (East West Japan AMCY-2039)

直接関係ないと言えるが、POEというニックネームが昔からあるボーカリストのアルバム。

(12)*葛生千夏/*The City in the Sea* (日) (1991)

(CD) (Salisbury Adisc-SAL0001)

ポアの“Fairy-Land” “The City in the Sea” “Eldorado” “Eulailie — A Song”などに曲をつけて歌っている。その他にも Alfred Tennyson の “The May Queen” “The Voyage”、シェイクスピアのソネットの113番 “Since I Left You”なども収録されている。

(13)*葛生千夏/*The Lady of Shalott* (1992)

(CD) (Salisbury Adisc-SAL0002)

翌年のセカンド・アルバムでは自作詞が増えるがそれでも、ポアの “To Helen” “The Haunted Palace” を用いている。さらに、テニソンの “The Lady of Shalott” “Elaine the Fair”、キーツの “Isabella” などもある。

19. Ayn Rand

(1)*Rush/*2112* (Canada) (1976)

(Japanese press LP) (EPIC SONY 25-3P-267)

20. Tom Robbins

(1) Another Roadside Attraction/self title (Canada) (1979)

21. J. D. Salinger

(1)*The Wynona Riders/J.D. Salinger (米) (1995)
(CD) (Lookuout Records)

22. John Steinbeck

☆ *The Grapes of Wrath*

(1)*Woody Guthrie/"Tom Joad Part 1" "Tom Joad Part 2" (米)
(1940) (CD reissue in 1996) (BMG Victor BVCP-7445) 本文参照

(2)*Bruce Springsteen/"The Ghost of Tom Joad" (米) (1997)
(Japanese press CD) (Sony SRCS 8244~5) 本文参照

(3)*Camel/*Dust and Dreams* (英) (1992)
(Japanese press CD) (Pony Canyon PCCY-00339) 本文参照

CAMEL

DUST AND DREAMS



Camel/Dust and Dreams

- (4)*The Mission/「怒りの葡萄」 “Grapes of Wrath” (英) (1990)
(Japanese press CD) (Mercury PPD-1129)
- (5)*Spear of Destiny/*Grapes of Wrath* (英) (1983)
(original LP) (EPIC EPC 25318)
- (6)*Pervis/“The Grapes of Wrath” (米) (1997)
(CD) (Idol Records IR 008)
- (7)*Rage/“The Grapes of Wrath” (独) (1987)
(CD reissue in 1993) (ビクター-VICP-23072)

ドイツのヘビーメタルバンドの2枚目のアルバム、*Execution Guaranteed* からの曲。インストのため、グループによる『怒りの葡萄』の解釈は分からないが、曲調や他の曲の歌詞から考えると、「怒り」という部分がク

ローズアップされているようである。

(8)*Jon Bon Jovi/“Little City” (米) (1997)

(Japanese press CD) (Polygram PHCD14007/8)

ジョン・ボン・ジョビのソロ・アルバムからの曲。直接『怒りの葡萄』には関係ないが、歌詞に “grapes of wrath” が登場する。

(9)*The Grapes of Wrath (Canada、グループ名) (1980 年代)

日本ではあまり話題になったことがないが、カナダではかなりのビッグ・ネームになっていたらしい。解散後もメンバーが活躍中である。

(10) The Grapes of Wrath (米、グループ名) (1960 年代末)

(11)The Grapes of Wrath (米、グループ名) (1966) (California)

(12)The Grapes of Wrath (米、グループ名) (196?) (Texas)

(13)Grapes of Rath/*Glory* (米、グループ名) (1968 or 69)

(14)Grapes of Wrathe (米、グループ名)

(15)Apes of Wrath (米、グループ名)

☆ *East of Eden*

(1)*Nino de Angelo/*East of Eden* (独?) (1984)

(LP) (Polydor PDS 1 6411)

(2)*Dieter Osten/*East of Eden* (米) (1986)

(LP) (Moon Records TOAST 011/012)

(3)*Michael Macdonald/“East of Eden” (米) (1993)

(Japanese press CD) (Reprise WPCP-5450)

(4)*J. Murphy Martin/“East of Eden” (米) (1981)

(EP) (Soundwaves Records SW 4631)

(5)*East of Eden/self title (米、グループ名) (1989)

(cassette) (Capitol C4-48483)

(6)*East of Eden (英、グループ名) (1970 年前後)

(7)*Big Country/“East of Eden” (英) (1984)

(Japanese press CD) (Mercury PHCR-1136)

☆その他

- (1)° Tortilla Flat/*Fü Ein 3/4 Stüdche* (独) (1974)
- (2)*Eddie Cano/"Tortilla Flats part 1" "Tortilla Flats part 2" (米) (?)
(EP) (Reprise 0382)
- (3)*Mack and the Boys/*From the Hip* (英仏) (1988)
(Japanese press CD) (Crammed Discs 32CRD-113)
- (4)*Wayward Bus/"Prophet" (米、グループ名) (?)
(EP) (RCA Victor 47-9498)
- (5)*Wild Stares/"The Moon Is Down" (米) (1982)
(EP) (propeller product no. 8)
- (6) Andy Irvine/"Viva Zapata!" (Ireland) (1991)

23. Mark Twain

- (1)*Richard Hayman/"Huckleberry Finn" (米) (?)
(EP) (Mercury 70333-X45)
- (2)*Rush/"Tom Sawyer" (Canada) (1981)
(CD reissue in 1997) (Atlantic AMCY-2296)
- (3)*徳山 秀典/「ハックルベリー」 (1999)
(CDEP) (PONY CANYON PCDA-01188)

24. Kurt Vonegut

- (1)*Billy Pilgrim/self title (米、グループ名) (1984)
(CD) (Atlantic 82515-2)

25. Walt Whitman

- (1)°*Weather Report/*I Sing the Body Electric* (米) (1972)
(Japanese press LP) (CBS Sony SOPL 37)

直接的にホイットマンの作品への言及はないが、アルバム・タイトルとジャケットと当時のバンドの置かれた位置を考えると面白い。従来のジャズの語法を逸脱し、「エレクトリック」という旗印の下に、新しい地平へと切り込んでいこうとする意気込みが感じられる。



Weather Report/I Sing the Body Electric

(2) Leaves of Glass (米、グループ名、シングルのみ, 1968)

(3) The Soul, Inc/“The Leaves of Glass” (196?) (米)

26. Tennessee Williams

(1) The Glass Menagerie (?、グループ名)

(2) Glass Menagerie (米、グループ名、シングルのみ 60年代末)

後に Santana (サンタナ) に参加する Mike Sherieve (マイク・シュリーブ) のいたグループ。

(3) Billy Cobham’s Glass Menagerie/*Smokin’* (米、グループ名)

(4) John Wright/“We’re Heard the Chimes at Midnight”

A Streetcar Named Desire に基づくものらしい。

27. Thomas Wolfe

(5) U. Utah Phillips/“Starlight on the Rails” (米) (?)

Of Time and the River に基づいたものらしい。